

Title	言語文化の比較と交流9 (冊子)
Author(s)	
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2022, 2021
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/88375">https://hdl.handle.net/11094/88375</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

言語文化共同研究プロジェクト2021

# 言語文化の比較と交流 9

渡辺 貴規子

中 直一

大阪大学大学院言語文化研究科

2022

## まえがき

本共同研究プロジェクトは、大阪大学大学院言語文化研究科言語文化専攻に所属する教員と、同専攻博士後期課程に在籍する大学院生をメンバーとして 2013 年度に発足した。9 年目となる 2021 年度は、昨年度にひきつづき教員 6 名で研究を行った結果、2 名の論文が掲載に至った。

「言語文化の比較と交流」という名称が示すように、本プロジェクトは、専門分野を異にする研究者が大きな枠組みの中で緩やかに繋がり、それぞれのテーマを追求しつつも、各自の研究の底流をなす「比較と交流」という視点から、言語文化学に寄与することを目的としている。本書は、その共同研究の成果を集成したものである。

2022 年 4 月、大阪大学は言語文化研究科と文学研究科を統合し、人文学研究科を新設した。これに伴い、言語文化専攻も人文学研究科言語文化学専攻として生まれ変わった。本共同研究プロジェクトが、言語文化学の発展に些少なりとも貢献しうるように、新体制においても長く継続されることを期待したい。

なお本書は言語文化研究科の最終年度に実施されたプロジェクトの研究成果であるため、表紙にはプロジェクトを所管した言語文化研究科の名称が掲げられているが、発行が新研究科発足後となったため、奥付所載の発行主体は人文学研究科となっている。

田 中 智 行  
中 直 一  
中 村 綾 乃  
平 山 晃 司  
三 浦 あゆみ  
渡 辺 貴規子

言語文化共同研究プロジェクト 2021

言語文化の比較と研究 9

目次

渡辺貴規子

明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記

—ヒロイン像の変容をめぐって—..... 1

中直一

『獨逸語學雜誌』の読者層

—雑誌記事の分析より—.....11

# 明治時代後期の少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記 —ヒロイン像の変容をめぐって—

渡辺貴規子

## 1 はじめに

英仏百年戦争でイギリス軍に包囲されたオルレアンを解放し、フランス国王シャルル七世を戴冠式へと導いたジャンヌ・ダルクは、日本でも明治時代初期から書籍・雑誌の中で紹介されてきた。そして明治30年代半ばに少女雑誌という女児専用のメディアが誕生した後は<sup>1</sup>、複数の少女向けの読み物において伝記が掲載された。周知の通り、ジャンヌ・ダルクが歴史の舞台に現れたのは約二年間のみである。彼女は17歳で故郷の村を離れ、戦士としての使命を全うした後、19歳で火刑に処され非業の死を遂げた。明治時代後期の少女雑誌の言説が良妻賢母主義的規範の影響を強く受ける中、妻にも母にもならず若くして亡くなったジャンヌの姿は、どのように語られたのであろうか。本稿では、明治時代後期に刊行された、少女向けの書籍・雑誌におけるジャンヌ・ダルク像の特徴とその変容について考察したい。

本稿で検討するのは、明治30年代後半から明治末期に刊行された三つの少女雑誌に掲載された作品、および少女読者向けの書籍に収録された二つの作品である。いずれも書籍・雑誌のタイトルに「少女」という語を冠する。刊行年の古い順から列挙すると、『外国少女鑑』（博文館、1902年）所収「ジオアンダーク（仏蘭西）」<sup>2</sup>、『少女界』掲載の「仏国の女将軍」（1906年）<sup>3</sup>、『少女世界』掲載の「ジャンヌダーク」（1907年）<sup>4</sup>、『少女鑑』（金港堂書籍、1910年）所収「ジャン・ダーク」<sup>5</sup>、『少女の友』掲載の「女の乃木大将オルレアンの少女」（1912年）である<sup>6</sup>。『少女界』、『少女世界』、『少女の友』は明治時代後期の代表的な少女雑誌であり、『外国少女鑑』、『少女鑑』は若い女性の模範的な徳行を記した例話集で、『婦女鑑』（1887年）などの成人女性向けの例話集を模した書籍である。

明治時代に出版されたジャンヌ・ダルクに関する文献についての先行研究には、高山一彦の研究と渡邊洋子の研究とがあり<sup>7</sup>、両者ともにジャンヌ・ダルクを日本に初めて紹介した『西洋英傑伝』（1869年）以降の単行本、新聞記事、雑誌等におけるジャンヌ・ダルクの表象の変遷、および変遷の背景にある社会的要因に迫っている。しかし、両者の研究では、一部のわずかな作品を除き、児童向けの作品は考察の対象とされず、少女向けの読み物については言及されていない。筆者はこれまで、『西洋英傑伝』所収のジャンヌ・ダルク伝<sup>8</sup>、明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記の特徴について論じたことがあるので<sup>9</sup>、本稿を加えることで、明治時代刊行の児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記について概観できることになり、先行研究を補完することも期待できるだろう。

第2節以降の本稿の構成は次の通りである。第2節では、少女雑誌というメディアが誕生

---

※明治時代の資料からの引用の際には、適宜旧字を新字に改め、ルビを省略・付加した。また、合略仮名については分解して表記した。

<sup>1</sup> 本稿第2節参照。

<sup>2</sup> 下田歌子「ジオアンダーク（仏蘭西）」『外国少女鑑』、博文館、1902年、127-136頁。

<sup>3</sup> 岡本胡蝶「仏国の女将軍」『少女界』第5巻2号、1906年2月、53-59頁。

<sup>4</sup> 沼田笠峰「ジャンヌダーク」『少女世界』第2巻7号、1907年5月、50-55頁。沼田笠峰「ジャンヌダーク」『少女世界』第2巻8号、1907年6月、85-90頁。

<sup>5</sup> 金港堂書籍株式会社編集部「ジャン・ダーク」『少女鑑』、金港堂、1910年、161-194頁。

<sup>6</sup> 鈴屋花子「女の乃木大将オルレアンの少女」『少女の友』第5巻13号、1912年11月、18-21頁。

<sup>7</sup> 高山一彦「明治日本におけるジャンヌ文献」『図録 ジャンヌ・ダルク展』、1982年、176-178頁。高山一彦『ジャンヌ・ダルク—歴史を生き続ける「聖女」』、岩波新書、2005年。渡邊洋子「明治におけるジャンヌ・ダルク」、『独文学報』第14号、1998年、1-20頁。

<sup>8</sup> 拙稿「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象—『西洋英傑伝』を中心に」、『千葉大学教育学部研究紀要』、第67巻、2019年、422-412頁。

<sup>9</sup> 拙稿「明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記」、『言語文化の比較と交流8』（大阪大学大学院言語文化研究科・言語文化共同研究プロジェクト）、2021年、43-52頁。

する以前のジャンヌ・ダルクの伝記について、児童読者が意識されたとと思われるものを中心に整理する。第3節では、本稿で取り扱う各作品の基本的事項をまとめ、第4節では、少女向けの読み物におけるジャンヌ・ダルク像の特徴とその変容について考察する。第5節で、その変容の背景について述べる。最後に第6節でまとめを付す。

## 2 少女雑誌誕生以前の児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記

筆者の調査では、1868（明治元）年から1912（明治45・大正元）年に日本で出版されたジャンヌ・ダルクに関する記事および単行本は65件に上り<sup>10</sup>、最も早く出版されたのが『西洋英傑伝』所収「二編上 仏郎国女傑如安之伝」（1869年）である。『西洋英傑伝』は、児童読者が意識されつつ書かれたと言える。原典はスコットランドの女性作家、マーガレット・フレイザー・タイトラー（Margaret Fraser Tytler）による児童向け伝記集、*Tales of the Great and Brave* シリーズ全二巻（1838-1840年）であり、翻訳者の作楽戸痴鶯も児童への読み聞かせを意識して翻訳した<sup>11</sup>。また、この書物は世界史教育と国語教育に貢献した翻訳啓蒙書の一冊であり、明治時代初期の学校教育現場で読まれた可能性が高い。「学制」（1872年）頒布直後から世界史の教科書の一冊として使用され<sup>12</sup>、国語教育の場でも、小学校で読まれる読本の一冊として「文部省布達・第五八号」（1873年4月29日）の指定を受けた<sup>13</sup>。

高山一彦が『西洋英傑伝』でジャンヌ・ダルクは「〈愛国心〉の典型」、「無双の女勇士」として描かれたと指摘した通り<sup>14</sup>、この作品では戦闘の場面が活写された。ジャンヌの慈悲深さ、優しさにも言及される一方で、「<sup>はげしき</sup>烈敷号令」、「女将軍」、「豪猛なる勇威」などの言葉で、ジャンヌは人並外れた勇敢さを持つ強い女性として描かれている<sup>15</sup>。

その後、『世界蒙求 前編』（1873年）、『各国英智史略』（1873年）、『世界智計談 中』（1874年）、師範学校編『万国史略 卷二』（1874年）、西村茂樹編『校正万国史略 卷之六』（1875年）、『仏国史略 卷之三』（1875年）、『法蘭西志』（1878年）、『東西蒙求 卷之二』（1884年）、『仏蘭西史』（1890年）など、多数の世界史・フランス史の教科書でジャンヌ・ダルクの挿話が相次いで紹介され、明治20年代には児童雑誌・少年雑誌の中で伝記が繰り返し掲載された<sup>16</sup>。その最初は『穎才新誌』に掲載された読者の投稿作文「女傑ジョアンダーク伝」である<sup>17</sup>。内容は坪谷善四郎著『仏蘭西史』（1890年）の記述がほぼそのまま抜粋された2000字に満たない短い文章であった<sup>18</sup>。しかしその後、文学・歴史を題材とする読み物に注力した少年向け総合雑誌の出版が本格化すると、デヴィッド・ヒューム（David Hume, 1711-1776）『イングランド史』（*The History of England, 1754-1762*）の挿話の翻訳<sup>19</sup>、思想家の高山樗牛が独自に執筆したジャンヌ・ダルク伝が発表され<sup>20</sup>、読み物

<sup>10</sup> このうちの58件については、以前拙稿にリストを掲載したので参照されたい（拙稿、前掲「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象」、412頁）。これに加え、以下の7種の文献が2021年4月までに確認されたのでここに列挙する。作楽戸痴鶯他編『万国史略 中編下』、文部省、1874年；西村兼文『外国史略 卷三』、寿楽堂、1874年；可笑生「女傑若安達亜克の偉勳」、『少年文武』、2巻3号、1891年；内田不知庵「如安外伝」、『読売新聞』、1893年；岡本胡蝶「仏国の女将軍」『少女界』5巻2号、1906年；沼田笠峰「ジャンヌダーク」、『少女世界』第2巻7-8号、1907年；澤田撫松「將に亡びんとする仏蘭西を再建せしオルレアン少女」、『婦人くらぶ』（紫明社）、4巻10号、1911年。

<sup>11</sup> 拙稿、前掲「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象」、421-420頁。

<sup>12</sup> 木全清博「万国史教科書の内容分析(1)」、『滋賀大学教育研究所紀要』第22号、1998年、35-42頁。

<sup>13</sup> 府川源一郎『明治初等国語教科書と子ども読み物に関する研究』ひつじ書房、2014年、19-20頁。

<sup>14</sup> 高山一彦、前掲書、『ジャンヌ・ダルク』、13-14頁。

<sup>15</sup> 作楽戸痴鶯、『西洋英傑伝』、英蘭堂、1872年補刻（京都大学人文学研究所蔵）、初編上、13丁オ。

<sup>16</sup> 拙稿、前掲「明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記」参照。

<sup>17</sup> 江連松花「女傑ジョアンダーク伝」、『穎才新誌』、第683号、1890年8月、2-3頁。

<sup>18</sup> 拙稿、前掲「明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルクの伝記」46-48頁。

<sup>19</sup> 無署名、「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第89号、1892年7月、18-21頁；同左、第91号、1892年8月、14-17頁。岳仙叟「如安達克」『少国民』第9巻25号、1897年12月、5-17頁。

<sup>20</sup> 高山林次郎「ジャンヌ、ダルク」『少年世界』第4巻27号、1898年、60-66頁。

としての充実度も増した。

明治 20 年代の少年向けの伝記では、ジャンヌの美德として信仰深さや慈悲よりも、「忠君愛国」の精神、強さ、勇姿が強調される傾向にあった。これは少年雑誌の読者が男児を中心とする児童であり、彼らを鼓舞する目的があったためと考えられる。例えば『穎才新誌』でのジャンヌは「忠君愛国ノ教ヲ受ケ、長スルニ及ンデ、勤王ノ念益々深」くする人物として描かれ<sup>21</sup>、『少年園』では「肝勇拔群」で「女性の常なる怯弱優柔の質を除却」した雄々しい女性であるとされた<sup>22</sup>。

このように『西洋英傑伝』以来、明治時代中期まで、児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記では強いヒロイン像が描かれた。それは児童向けの初めての単行本である中内蝶二『惹安達克』（1901 年）でのジャンヌ像にも引き継がれた。中内はジャンヌを「奇代の女丈夫」と表現し<sup>23</sup>、その功績を「武夫もなほ及ばざるの偉功」と称えた<sup>24</sup>。そして死を前にした彼女の態度さえも、「名を重むじて、不義の余命を貪らむと欲せず、凜乎たる節操嚴霜の如く、千載の下、有髯男子をして後に膛若たうしむるに足れり」と書かれ<sup>25</sup>、彼女の武勲や強さが大人の男性に引けを取らなかったとされた。しかしながら、こうした雄々しいヒロイン像は、少女向けの読み物の中では次第に変容するのである。

### 3 少女向けのジャンヌ・ダルクの伝記の出版

少女雑誌という女兒専用のメディアは「少女」という概念とともに生まれ、少年雑誌よりも後で誕生した。明治時代半ばにおいて、「少年」という概念は男児と女兒の両方を内包し<sup>26</sup>、『少年園』など「少年」という言葉を冠した雑誌にも女兒の読者は存在した<sup>27</sup>。しかし日清戦争、日露戦争の二度の対外戦争の経験とそれに伴う国家主義の機運の高まりにより、国家に尽くし立身出世を目指すべき男児と、家内の役割を担う良妻賢母を目指すべき女兒とがより明確に区別されるようになる<sup>28</sup>。たとえば『少年世界』の紙面に女兒専用の記事を集めた「少女欄」が開設され（1895 年 9 月）、やがてそれが『少女世界』の創刊（1906 年）へと発展するように<sup>29</sup>、「少年」読者から「少女」読者は切り離され、明治 30 年代から明治末には『少女界』（1902 年創刊）、『少女世界』、『少女の友』（1908 年創刊）、『少女』（女子文壇社、1909 年創刊）、『少女画報』（1912 年創刊）など少女雑誌が相次いで創刊された。そして、1899（明治 32）年の高等女学校令により女学生の数が大幅に増えたことも、その背景として重要である。相次ぐ少女雑誌の創刊は女学生を中心とする年少の女性読者のニーズに実際に応えるものでもあった。

本稿第 2 節で言及した、児童雑誌・少年雑誌におけるジャンヌ・ダルク像と少女向けの読み物におけるそれとを比較する際には、次の二点については少女向けの読み物の後発性を考慮に入れねばならない。第一に、文体の面で、漢語を多用する文語体から仮名が中心の言文一致体が主流となり、文章の印象が柔和なものに変化する点である。第二に、文章の長さの面で、少女向けの読み物に掲載されるジャンヌ・ダルク伝はそれ以前のものよりも長文で、かつ児童向けの読み物として分かりやすさ、面白さも追求される傾向がある。

<sup>21</sup> 江連松花、前掲「女傑ジョアンダーク伝」、2 頁。

<sup>22</sup> 無署名、前掲「ジョアン、ダークノ伝」『少年園』第 89 号、19 頁。

<sup>23</sup> 中内蝶二『世界歴史譚第三十二編 惹安達克』、博文館、1901 年、104 頁。

<sup>24</sup> 同上、37 頁。

<sup>25</sup> 同上、107-108 頁。

<sup>26</sup> 「少年」「少年/少女」の概念の変容は以下を参照。田嶋一「「少年」概念の成立と少年期の出現」『国学院雑誌』95 巻 7 号、1994 年、1-15 頁。今田絵里香「「少年」から少年・少女へ—明治の子ども投稿雑誌『穎才新誌』におけるジェンダーの変容」『教育学研究』71 巻 2 号、2004 年、214-227 頁。

<sup>27</sup> 久米依子「メディアにおける〈少女〉の成立—雑誌『少年園』をめぐって」『目白近代文学』第 11 号、1994 年、17-26 頁。

<sup>28</sup> 中川裕美『少女雑誌に見る「少女」像の変遷—マンガは「少女」をどのように描いたのか』出版メディアパル、2013 年、38-44 頁。

<sup>29</sup> 続橋達雄「〈少女〉欄の作品」『児童文学の誕生—明治の幼少年雑誌を中心に』桜楓社、1972 年。尾崎るみ「〈少女小説〉の源流—『少年世界』『少女』欄開設の背景」『白百合女子大学児童文化研究センター研究論文集』第 7 号、2003 年、80-95 頁。中川裕美、前掲書、22-33 頁。

この二つの特徴を踏まえた上で、本稿で検討する五作品の基本的事項を、以下の①～⑤で整理したい。このうち、①の文章については出典が判明しており、かつ本稿第4節で述べるジャンヌ像の特徴とは異なる側面があるため、その点についても述べる。②～⑤は文章が掲載された書籍・雑誌に関する説明、文章の長さなど基本的事項と全体的な特徴を中心に簡潔に述べていく。

## ①下田歌子「ジヨアンダーク（仏蘭西）」『外国少女鑑』（博文館、1902年）所収

『外国少女鑑』は当時の華族女学校学監であった下田歌子が編集し、博文館から出版した「少女文庫」（全六巻）の一冊である。「緒言」では「我が国の外、東西洋諸国に聞えたる、はやくより、今にいたるまでの少女がすぐれたる事績<sup>30</sup>」を紹介し、「少女が忠貞孝義の言行を、更に今取捨補綴<sup>31</sup>」した同じシリーズの『内国少女鑑』と合わせて読むことが推奨される。先行研究では『婦女鑑』（1887年）の強い影響が指摘され、『外国少女鑑』の36の例話のうち、14の例話が『婦女鑑』と同じ人物を扱っている。『婦女鑑』は昭憲皇后の内意を受けて宮内省文学御用掛の西村茂樹が編纂し、宮内省蔵版として出版された後、華族女学校にも下賜されたためこのような影響関係が見られると推定される。<sup>32</sup>

『外国少女鑑』所収の「ジヨアンダーク（仏蘭西）」は約2500字の比較的短い文章であり、『婦女鑑』の漢文体の硬質な文章を言文一致体に変換しつつ書かれた。

われ初めて神の靈異を見しハ。十三歳のときにて。その形状を赫耀たる神靈あり。余に告て曰く。汝常に神を敬し。善事を行へ。神は必汝を保護すべしと。爾後昼夜の別なくその声常に耳に断えず。今こそわれ神の冥助に依りて。兵馬の権を握り。敵兵を打靡け。太子沙爾<sup>シャルル</sup>を奉じて。黎牧府<sup>レーム</sup>に即位の式を行わしめんとおもへり。（「若安達亜克」『婦女鑑 四』、宮内省、1887年、44丁ウ～45丁オ。句点原文ママ）

私は、十三歳の時に、神のお告を得ました。汝は立つて、この仏蘭西を救はねばならぬと。其れからといふものは、毎日々々、幾度と無く、神は、告げて、早く事を挙げよ挙げよと仰せられます。……で。私は、一日も速かに兵馬の権を握り、敵兵を打ち払つて、太子を、仏王の位に即け奉らねばなりませぬ。（下田歌子「ジヨアンダーク（仏蘭西）」『外国少女鑑』、1902年、130頁。）

『婦女鑑』の「若安達亜克」では「若安の豪胆<sup>33</sup>」が敵を恐怖に陥れ、味方に勇気を与える様子が書かれるなど、本稿第2節で述べたような強いジャンヌ像が書かれた。『外国少女鑑』もこの特徴を引き継ぎ、ジャンヌは「幼きより心雄々し」い人物で、比類ない「西洋の女傑」であると書かれた<sup>34</sup>。この『外国少女鑑』におけるジャンヌ伝は、本稿第4節で検討するジャンヌ像の特徴があまり当てはまらない。少女向け読み物のジャンヌ・ダルク像が次第に変容するということがこの作品の存在により明らかになる。

## ②岡本胡蝶「仏国の女将軍」『少女界』第5巻2号（1906年2月）

『少女界』は金港堂が1901（明治34）年に創刊した日本初の少女雑誌で、同時に創刊された『少年界』の姉妹誌である。博文館の『少女世界』とともに人気を博した。たとえば第1巻第3号所収の論説に「男子と云ふものは、イザ戦争と云ふ時には命懸の働をして国家の為に尽します。女子は家にあつて男子の事業を援けて、男子が国家の為に尽す手助を

<sup>30</sup> 下田歌子「緒言」『外国少女鑑（少女文庫第四編）』、博文館、1902年。

<sup>31</sup> 下田歌子「緒言」『内国少女鑑（少女文庫第三編）』、博文館、1901年。

<sup>32</sup> 越後純子『近代教育と『婦女鑑』の研究』、吉川弘文館、2016年、264-283頁。尾崎るみ「国定国語教科書にグレース・ダーリングが登場するまで—明治の少女向け読み物の軌跡（九）」『論叢 児童文化』、第49号、2012年、61頁。

<sup>33</sup> 「若安達亜克」『婦女鑑 四』、宮内省、1887年、47丁オ。

<sup>34</sup> 下田歌子「ジヨアンダーク（仏蘭西）」『外国少女鑑』、1902年、127-128頁。



しなければなりません<sup>35</sup>」と書かれたように、雑誌の基調として、将来家庭内で男性を支える女性となるべきことが説かれた。「仏国の女将軍」は約 4000 字の文章で、史実と異なる記述もあり、少女読者に相応しいように手を加えられながら書かれたことが判明する。

### ③沼田笠峰「ジャンヌダーク」『少女世界』第 2 巻 7 号～8 号（1907 年 5 月～6 月）

『少女世界』は 1906（明治 39）年 9 月に博文館が『少年世界』の姉妹誌として創刊した少女向けの総合雑誌で、創刊当時の体裁はすべて『少年世界』に準じた。内容は良妻賢母主義的規範に準じ、明治の女子教育に基づく教養、修身、手芸、読み物、投稿欄等の内容で構成された<sup>36</sup>。「ジャンヌダーク」は主筆の沼田笠峰が二号に渡り執筆し、前編後編を合わせて 9000 字余りの文章となる。分量も比較的多く、歴史的叙述にも紙幅が割かれ、年号や挿話の記述は史実にかなり忠実である。第 2 巻第 7 号掲載の前編ではジャンヌの少女時代からシノンで王太子と謁見するまで、第 2 巻第 8 号掲載の後編ではオルレアンの解放、戴冠式の記述のあと、急転直下のごとくジャンヌが火刑に処せられるまでが書かれる。

### ④「ジャン・ダーク」『少女鑑』（金港堂、1910 年）所収

日本、西欧、中国の 32 名の女性の伝記を集めた例話集で「家庭に於いて少女に読ましむべき良書甚だ乏し」という世間の「要求に應ぜん」として編集されたと述べられる<sup>37</sup>。金港堂は、博文館とともに明治時代後期の児童文学出版を牽引した二大出版社のひとつであり、『少女界』を発行した出版社でもあるため、少女向けの例話集の発行は『少女界』の読者やその父兄、教育関係者などの「要求」に応じたものと考えられる。西欧の女性はジャンヌ・ダルクのほかにナイチンゲール、画家のロザ・ボヌール、シャルロット・コルデー、ストウ夫人など計 8 名である。「ジャン・ダーク」は 1 万 3000 字から 1 万 4000 字の文章で、今回検討する五種の文章の中で最も長文である。しかし、年代の記述がないなど、正確さを期した歴史的叙述よりも、作者が想像を交えつつ書いたと思われる細かな挿話にページが割かれている。

### ⑤鈴屋花子「女の乃木大将オルレアンの少女」『少女の友』第 5 巻 13 号（1912 年 11 月）

『少女の友』は 1908（明治 41）年創刊の実業之日本社発行の月刊誌で、戦後（1955 年）まで続いた人気雑誌である。創刊からしばらくは『少女世界』を競合誌とし、小学校上級生から女学生に向けた娯楽・教養・投稿が中心の良妻賢母主義教育に沿った内容で構成された。1923 年に雑誌『少女倶楽部』が大日本雄弁会から創刊されて以降は娯楽性を強め、人気を二分した<sup>38</sup>。「女の乃木大将オルレアンの少女」は約 3000 字の比較的短い文章の中に、ランスの戴冠式までが中心に記述される。乃木希典とその妻の殉死（1912 年 9 月 13 日）から約二か月後に掲載された記事であり、「乃木大将と其の奥様とのことは実に、何とも申しやうのない立派なことをなさったもの」であると、殉死の礼賛を基調としつつ、乃木希典のような「忠義な人」が、読者に年近い「十七歳の少女」であったことが冒頭部で強調され、忠君愛国の精神に殉じる少女としてジャンヌ・ダルクが描かれる<sup>39</sup>。

## 4 少女向け読み物でのジャンヌ・ダルク像の特徴—「女傑」から身近な「少女」へ

本節では、本稿第 2 節で概観した明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌のジャンヌ像とは異なる特徴を持つ、少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクに関する言説を整理し、その中で造形されたジャンヌ・ダルク像の特徴を検討する。

本稿第 3 節でも述べた通り、この特徴は『婦女鑑』のジャンヌ像を継承する『外国少女鑑』所収の「ジョアンダーク（仏蘭西）」にはあまり見られず、ヒロイン像が徐々に変容したことが判明する。本節では、少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの言説の特徴

<sup>35</sup> 奥村五十子「女子の義務」『少女界』第 1 巻第 3 号、1902 年 6 月、62 頁。

<sup>36</sup> 日本児童文学学会編『児童文学事典』、東京書籍、1988 年、379 頁。

<sup>37</sup> 「序」『少女鑑』、金港堂、1910 年。

<sup>38</sup> 日本児童文学学会編、前掲書、380 頁。

<sup>39</sup> 鈴屋花子「女の乃木大将オルレアンの少女」『少女の友』、第 5 巻 13 号、1912 年、18 頁

を次の三点にまとめたい。つまり、①具体的な美しさの描写、②弱さと強さの共存、③「家の娘」としての葛藤、の三点である。なお、本節で作品から引用を行う際には、各作品の掲載雑誌名・掲載書籍名と頁数を、『少女世界』の文章については巻号も加え、丸括弧内に記す。

### ①具体的な美しさの描写

高山一彦によると、ジャンヌ・ダルクの容貌について裏付ける遺物や史料は存在せず、ジャンヌの外見は現在の歴史学においても謎に包まれている。二十キロはあったであろう甲冑を身にまとい、馬に乗り戦ったことを現実的に考えると、かなり頑強な女性であったはずであり、後代の文学作品・演劇・図像にしばしば見られる、華奢な美少女としてのジャンヌ・ダルク像は「演出者の勝手な創作」であるという。<sup>40</sup>

しかし、現代の日本で出版される児童向けのジャンヌ・ダルクの伝記において、彼女が美少女だということはまるで自明であるかのようだ<sup>41</sup>。そしてジャンヌの美しさの具体的な描写が児童向けの伝記の中で見受けられるようになったのが、本稿で問題にする明治時代の少女向けの作品群においてである。明治時代中期の少年雑誌であっても、例えば高山林次郎の「ジャンヌ、ダルク」には「容貌秀丽なる一少女」という表現が確かに見受けられた<sup>42</sup>。しかし「容貌秀丽」というたった一語で表されたそれは、彼女の偉大さの表現の一環であるようにも解釈できる。それに対し、少女向けの読み物では、声、髪、軍服姿など具体的な美しさが語られるようになる。

ジャンヌの声の美しさについては、シノンで王太子シャルルに謁見した際に、自らがシノンに来た目的を「言葉爽やかに言上いたしました」（『少女界』56頁）、「さわやかに申し述べました」（『少女世界』2巻7号、55頁）、「美しい声で言上いたしました」（『少女鑑』181頁）と言及される。また、外見についての描写は、次の通りである。

金の様な色の房々とした美しい髪を、颯と後ろに垂れて、威風凛々しく馬に跨り、多くの兵隊を率ゐて、シノン府を出発し、オルレアン<sup>マ</sup>の城に向ひました（『少女界』57頁）

色が白く、目鼻立が美しく、其上に起居挙動に気品があつたものですから、両親は常にゼハネット、ゼハネットと呼んで、掌中の玉とばかりに可愛がつて居りました。（『少女鑑』162頁）

ジャンヌは美しい軍服を着け、黄金色の髪を眉間から分けて房々と肩まで垂れ、肥えた馬に跨って、静に城の門から出ました時は、朝日が其の美<sup>マ</sup>くしい姿の上に輝いて、敵も味方もウツトリと其の武者振りに見とれてみました。（『少女の友』20-21頁）

作品によって記述は異なるが、髪、肌、目鼻立ち、馬上の姿、立ち居振る舞いの気品までに至る具体的な描写は、挿絵こそないものの、美しいヒロイン像を読者にありありと喚起させる。少女読者にとって、美しいヒロインとしてのジャンヌは憧れを感じられる存在となり、ジャンヌの伝記の読み物としての魅力も増したと考えられる。

<sup>40</sup> 高山一彦、前掲書、『ジャンヌ・ダルク—歴史を生き続ける「聖女」』、94-108頁。

<sup>41</sup> たとえば学習漫画版の伝記シリーズでは、ジャンヌ・ダルクは被伝者として定番であるが、大きなキラキラした瞳を持つ金髪の美少女がつねに描かれる。これは、美内すずえ「白ゆりの騎士」（『花とゆめ』連載、1974-1975年）等のジャンヌ・ダルクを題材とした少女漫画の影響も大きいと考えられるが、児童文学の言説のレベルでは、明治時代の少女向けの読み物に遡ることができると考えられる。（cf. 木村尚三郎監修、高瀬直子『学習漫画 世界の伝記 ジャンヌ・ダルク—フランスを救ったオルレアン<sup>マ</sup>の乙女』、集英社、1995年。安達正勝監修、虎影誠『ジャンヌ・ダルク（コミック版世界の伝記）』、ポプラ社、2011年。安達正勝監修、たまきちひろ『ジャンヌ・ダルク（小学館版まんが人物館）』、小学館、2011年。藤本ひとみ『美少女戦士ジャンヌ・ダルク物語』、講談社青い鳥文庫、2011年。）

<sup>42</sup> 高山林次郎、前掲「ジャンヌ、ダルク」、61頁。

## ②弱さと強さの共存

少年雑誌ではジャンヌの強さが強調されたのに対し、少女向けの読み物においては、強さとともに弱さも表現されるようになる。

まず、「繊<sup>かよわ</sup>弱い女の身なのにも拘らず」（『少女鑑』167頁）、「繊<sup>かよわ</sup>弱い一少女の身を以て」（『少女界』54頁）、「かよわい一少女の身をも忘れ、勇ましく」（『少女世界』2巻7号、51頁）のように「かよわい」という言葉がしばしば用いられる。またフランス軍の惨状を見て「其小さき胸」（『少女界』54頁）を悔しさでいっぱいにしたという表現、「坐ろに女子に生れて来たことを情<sup>なさけ</sup>なく思ひました」（『少女鑑』165頁）という表現でも「小さき」「情なく」という言葉でジャンヌが弱い存在であることが表現される。さらに、「騎<sup>ナイト</sup>士の助力を得て」（『少女世界』2巻7号、53頁）ジャンヌが逆境を克服し、負傷の際には味方の将軍が彼女を「扶け起して自分の馬に乗せ」（『少女世界』2巻8号、87頁）たという、周囲の男性に助けられるジャンヌの挿話では、彼女が男性の助けを必要とする「かよわい」女性であることが想起させられる。

そして、『少女鑑』でのジャンヌは頻繁に涙を流す。天使の声を聴いた時、故郷の村を発つ時、ヴォークルールで将軍に自らの話を疑われた時、オルレアン<sup>ナイツ</sup>の戦闘での負傷時、ランスでの戴冠式への参列時、コンピエーニュで捕縛された時、火刑に処される直前、の七度にわたりジャンヌは涙を流し、その泣き方についても「身を震はして歎<sup>なげ</sup>歎りあげる」（『少女鑑』175頁）というように、「かよわい」ことが感じられる表現も見られる。

次に、強さについては身体的・能力的に優れている点だけでなく、むしろ精神的な強さが頻繁に述べられる。この点は『外国少女鑑』掲載のジャンヌ伝にも共通する。「少女の功績、実に絶倫と云ふべし」「少女が国に報いし希世の功」（『外国少女鑑』136頁）とジャンヌの功績を称えると同時に、その美点として「幼きより心雄々しく」（『外国少女鑑』128頁）、「熱心なる容<sup>マリア</sup>子」（『外国少女鑑』132頁）、「ジョアンが勇氣」（『外国少女鑑』133頁）などの言葉で、ジャンヌの内面の強さ、勇敢さが挙げられた。これは、他の少女向けのジャンヌ伝においても同じである。しばしば書かれたのは、王宮や教会裁判の場で、「少しも臆する色なく」（『少女界』56頁）答弁したという場面<sup>43</sup>、死を前にして「十分覚悟を決めて少しも騒がず、恐れ」ない様子（『少女世界』2巻8号、90頁）であり、精神的に追い詰められる場面でも平常心を保つ強さが表される。同様に精神的な強さを表す言葉として、「勇敢なるジャンヌダーク！」（『少女世界』2巻8号、87頁）、「勇敢なる少女」（『少女世界』2巻8号、88頁）、「勇氣に充ち満ちて」（『少女の友』20頁）と、勇敢さ、勇氣が語られ、「熱誠の色」（『少女世界』2巻7号、55頁）、「熱心に乞うて」（『少女世界』2巻7号、55頁）、「誠意誠心」（『少女鑑』176頁）、「強い決心」（『少女の友』20頁）と、意志の強さも表現された。ジャンヌの性格については、「利発」「男勝り」「活発」（『少女界』54頁）、「変つたところありませんでした」（『少女世界』2巻7号、50頁）、「遠慮勝な少女」（『少女鑑』163頁）、「忠義な人」（『少女の友』18頁）など様々である。しかし上述したような、精神的な強さについては、どの文献においても表現されている。

このような精神的な強さと弱さとを併せ持つヒロイン像に、少女を「かよわい」存在と見なした当時の少女観が反映されたことは言うまでもない。しかしそれと同時に、弱さが強さと併せて表現され、弱さを克服して勇敢に戦う姿が提示されることで、ジャンヌのけなげさが表現される効果もある。読者にとっては、ただ強い「女傑」のジャンヌ・ダルクよりも、弱さを克服して使命を果たす「かよわい」少女としてのジャンヌ・ダルクの方が身近に感じられ、自己同一化も容易であったのではないだろうか。

<sup>43</sup> 「少しも臆する色なく」（『少女界』56頁）と同様の表現は、次のように複数誌において繰り返し見られる。「少しも臆する気色なく」（『少女界』59頁）/「少しも臆する色とはなく」（『少女世界』2巻7号、52頁）/「少しも恐れる色とはなく」（『少女世界』2巻7号、55頁）/「何の臆する所なく」（『少女世界』2巻7号、55頁）。

### ③「家の娘<sup>44</sup>」としての葛藤

少女向け読み物におけるジャンヌ・ダルク像のもう一つの特徴は、家族、とくに両親との関係が書かれる点である。家族との関係に関する記述は、明治時代中期の児童雑誌・少年雑誌ではほとんどなく、『外国少女鑑』でも見られない。しかし、他の少女向けのジャンヌ・ダルクの伝記では、ジャンヌは両親と仲が良く、家族に関する記述が見られる。

『少女界』では、神からの「お告げ」について、ジャンヌは真っ先に両親に相談し、「両親は親戚の人々と相談を遂げた上、兎に角従軍を嘆願して見やうと云ふことになつて」（『少女界』55頁）、ジャンヌを村から送り出した。さらに、ジャンヌは戴冠式の後に「故郷に帰りました」（『少女界』58頁）とされ、史実とは違い一度故郷に帰ったことになっている。『少女世界』では、ジャンヌは「父母の仰せをよく守り」（『少女世界』2巻7号、50頁）、神の「お告げ」についてまず父に相談し、父がそれを信じないので、伯父を頼ったと書かれた。『少女の友』でも従軍をまずは父に相談し、父が猛反対し「早くお嫁にでもやつて<sup>しまは</sup>了ふ」（『少女の友』20頁）としたので叔父を頼ったと書かれた。

以上の三つの文献では、両親が従軍を許可するか否かに関わらず、ジャンヌはまず両親か父親に従軍について相談しており、両親の言いつけに忠実であろうとする娘だったことが書かれた。また、ランスの戴冠式の後「再びドムレミーの田舎へ退き、静かに羊飼ひの業に従ふ時が来たのです」（『少女世界』2巻8号、88頁）、「軍服を脱いで早く父母の許へ帰りたいと願ひました」（『少女の友』21頁）と両親の待つ村へ帰りたいというジャンヌの希望が書かれ、『少女界』ではジャンヌは故郷に帰ったとされた。

『少女界』のように、ジャンヌが両親の言いつけを守ったと記述される場合も、『少女世界』、『少女の友』のように、父母の言う通りに行動することを願ったが、願いが叶わなかったと書かれる場合も、ジャンヌは両親をないがしろにはしない。とくに後者の場合は、「家の娘」としての立場と戦士として従軍すべき状況との間で葛藤がある。こうした葛藤に焦点をあてて書かれたのが、『少女鑑』に収録された「ジャン・ダーク」である。

この作品においてジャンヌは「兄妹中の愛娘」（『少女鑑』180頁）であり、両親に「掌中の玉とばかりに可愛が」られていたが（『少女鑑』162頁）、従軍を父に相談しても取り合ってもらえず、伯父に頼んで村を出た。村を出る際には「お父様や、お母様が待つてゐるから早く帰つて来て呉れるやうに」（『少女鑑』180頁）と釘を刺され、ジャンヌ自身も「父母のことを思ひ出し度うございます」（『少女鑑』179頁）と言って、故郷で着用していた百姓服を持参した。戦場でも「一日も早くレーム府で仏王の加冠式を行ひ、[…]懐しい父母と共に羊を飼ひ度い」（『少女鑑』189頁）と考え、戴冠式後は「心置きなく故郷へ帰り、父母の傍らで暮し度く思つて」（『少女鑑』190頁）いたが、故郷に帰ることは叶わなかった。このように、この作品の中ではジャンヌは常に、家族への思いと、フランスを救う使命との間で葛藤する悲しい「家の娘」として描かれた。

①～③で見たように、明治時代後期の少女向けの読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記では、ジャンヌが自らの弱さと、家族を捨てざるを得なかった悲しさとを克服しつつ使命を果たす姿が描かれる。弱さや悲しみを抱えながらも、邁進するジャンヌの姿が清らかで凛々しく、美しいのであり、少女読者が見習うべき模範とされたのである。

明治時代中期の少年雑誌におけるジャンヌ像と明治時代後期の少女雑誌におけるジャンヌ像は著しく異なる。言わば、前者が強く優れた「女傑」を描いたのだとすれば、後者は泣きもすれば悲しみもする中で、自らを奮い立たせて頑張る身近な「少女」を描いた。この変容はどのような背景のもとに起こったのであろうか。

<sup>44</sup> 「家の娘」という言葉は、明治時代中期以降の言説空間において、家庭内の役割を果たすことが求められた少女を表す概念として久米依子が下記の論文内で用いている。ここでの「家」は成員の相互の愛情で結ばれた近代的家族のイメージで語られる一方で、少女たちにとってはあくまで娘としての「つとめ」を果たすべき規範と義務の場所であるとされる。(Cf.久米依子「少女小説—差異と規範の言説装置」、小森陽一ほか『メディア・表象・イデオロギー—明治三年代の文化研究』小沢書店、1997年、195-222頁、とりわけ196頁。)

## 5 ヒロイン像の変容の背景

本節では、ヒロイン像の変容の背景として二点指摘したい。第一に、成人の女性読者を意識した文献におけるジャンヌ・ダルク像の変容である。第二に当時の少女雑誌で提示された新しい「少女らしさ」の概念の影響である。

第一の点について、本稿第2節で言及した65件のジャンヌ・ダルク関連文献の中で、女性読者の啓蒙を意識した文献は多く、その中でジャンヌ像が明治30年代頃から保守化する傾向が見られた。児童向けの伝記の中でも少女向けのものにはその影響があり、「家の娘」としての側面を持つヒロイン像が造形されたのではないかと考えられる。

女性読者向けの最初のジャンヌ・ダルク伝は巖本善治が山下石翁の筆名で発表した「女傑アークの伝」（『女学新誌』掲載、1884年）であり、啓蒙的な婦人雑誌や、『婦女鑑』（1887年）、『悲憤壮烈 才女列伝』（1891年）、『泰西婦女亀鑑』（1892年）など女性向けの教訓書への掲載が続いた。渡邊洋子は「明治10年代から20年代にかけてのジャンヌ・ダルク像は女性の啓蒙を目的とし、『救国の英雄』という形で女性に社会参加のモデルを提供した<sup>45</sup>」と指摘した。実際に、例えば上述の「女傑アークの伝」は、『西洋英傑伝』のテキストに引用に近い形で抛りながらも、ジャンヌが「国家」に尽くす様子が加筆され、女性読者の社会意識を鼓舞する文章となっている<sup>46</sup>。しかしながら、明治30年代以降の文献、例えば『女子之友』掲載の「ジャンダーク嬢の一節」（1901年）、『婦人くらぶ』掲載の「将に亡びんとする仏蘭西を再建せしオルレ안의少女」（1911年）では、勇ましく強いジャンヌの代わりに、美しく優しいヒロインが登場した。さらに前者ではジャンヌへの求婚者が登場し、彼女が妻としても申し分のない女性であったことが記述され<sup>47</sup>、後者では家に帰ることなく亡くなった点について「これ果してジアン<sup>48</sup>の幸福であらうか」と読者に四度も問いかげられ、ジャンヌは家に留まるべきであったと主張される<sup>48</sup>。

渡邊は、「近代国家にとって女性の力は必要だが、あくまで女性にふさわしい範囲で力を発揮すべきで、その限界を踏みはずしてはならないという教えを世間に広めることが必要<sup>49</sup>」になった時、ジャンヌ・ダルク像は保守化したと述べ、その転換点となる作品として、シラー原作、藤沢古雪訳『悲劇 オルレ안의少女』（1903年）を提示した<sup>50</sup>。敵軍將校とジャンヌの悲恋という創作的要素を加えたシラーの戯曲のこの全訳が「愛のヒロイン」としてのジャンヌ像の変容に影響を与えたという渡邊の指摘は鋭い。

しかし、筆者はもう一つの転換点となる作品、そして少女向けのジャンヌ・ダルクの伝記の記述に影響を与えた文献として、『家庭雑誌』に掲載された宮崎湖処子「オルレ안의少女」（1895年）も挙げたい。なぜなら、宮崎湖処子が独自に執筆したと考えられるこの作品では、大切に育てられた「家の娘」としてのジャンヌの側面が強調され、忠君愛国からではなく、信仰心、家族への愛、王太子への愛を行動原理として戦う少女としてヒロインが描かれたからである。また、宮崎の描くジャンヌは、聖なる美をたたえ、国を救うことに喜びを感じながらも、戦場でもなお両親と村を思い出す少女であり、作品の中で家族のもとに帰りたいという彼女の願いが切々と表現された<sup>51</sup>。少女向けの読み物におけるジ

<sup>45</sup> 渡邊洋子、前掲論文、9頁。

<sup>46</sup> 拙稿、前掲論文、「明治時代初期の児童向け読み物におけるジャンヌ・ダルクの表象」、415頁。

<sup>47</sup> 例えば次の一節がある。「あはれ、世界の男子たらんもの、誰か彼女を愛せざるものぞ。[…]我が母に仕ふるハ自己の母に仕ふるが如く、又我れに対して謙譲にして其親切なりしことハいふばかりのことに非りき。[…]かかる婦人と一生を契りなば父も母も我も如何許り楽しからましと。」（勁林園主人「ジャンダーク嬢の一節」『女子之友』第86号、1901年、13頁。）

<sup>48</sup> 澤田撫松「将に亡びんとする仏蘭西を再建せしオルレ안의少女」『婦人くらぶ』、第4巻10号、1911年、80頁。

<sup>49</sup> 渡邊洋子、前掲論文、15頁。

<sup>50</sup> 同上、11-17頁。

<sup>51</sup> 次の複数の引用の中にその表現がある。「オルレ안의救を感謝して神を讃美し少女の勲功を頌したり。少女は感情の高潮に於て、却て父母の天井を懐ひき。」（宮崎湖処子「オルレ안의少女」『家庭雑誌』第54号、432頁。）「少女は国王加冠の式に向ひて急ぎたりき。彼は今讃美の海の中にあり、身崇拜の目的たる時にも、心は常に田園にあり、夢は父母の疎屋を巡りき。彼が故郷を懐ふの心は、何物を

ジャンヌ・ダルク像を検討した場合、宮崎の「オルレアンの少女」は、その変容に影響を与えた最初の作品なのではないかと考えられるのである。

最後に、少女向け読み物のジャンヌ・ダルク像が、当時少女雑誌の中で見直されつつあった、新しい「少女らしさ」の影響を受けた可能性を指摘して本節を締めくくりたい。少女雑誌の創刊当初、少年雑誌掲載の冒険小説を模した少女冒険小説が人気を博した。久米依子によると、規範を逸脱しない形で少女の冒険を苦心してひねり出す編集者や作者の苦勞をよそに、実際の少女読者たちはスリルとサスペンスに満ちた冒険小説に魅了され、「従来の〈あるべき少女像〉から徐々に離反<sup>52</sup>」する傾向にあった。そのため少女雑誌で伝える新しい「少女らしさ」が模索されなければならなくなった。その結果、従来の「温和にして道理に従うこと」、「高潔貞淑」、「分を忘れないこと」という抑制的で内的な規範から、周囲に対して「愛」を持つこと<sup>53</sup>、他者から「愛される」少女となり<sup>54</sup>、外からも「愛らしく」見えるよう外面的にも「愛らしさ」「あどけなさ」を持つことへと「少女らしさ」という規範の転換が起こった。「愛らしい」「あどけない」振る舞いが「少女らしい」とされた一方で「大人らしい」振る舞いは抑制されて、成長を急がず少女のままであることが求められた。<sup>55</sup>

明治時代後期の少女読者向けのジャンヌ・ダルク像が「女傑」から身近な「少女」へ変容したことは本稿第4節で述べた。弱さを克服しつつ戦う美しいジャンヌ、「家の娘」としての気持ちと戦士としての使命との間で苦しむジャンヌの姿は、読者の少女たちにとって憧れの存在であるとともに、容易に自己同一化できる身近な存在となった。そして同時に、当時の少女雑誌が模索した新しい「少女らしさ」について考えるとき、美しく「かよわい」ジャンヌがけなげに頑張る姿は周囲から「愛される」「愛らしい」ものであり、新しい「少女らしさ」を表すヒロイン像に近づいたのではないかとも思われるのである。

## 6 まとめ

少女向けの読み物におけるジャンヌ・ダルクの伝記に見られるのは、彼女の何を模範として読者に伝えるべきかという価値観の揺れである。「家の娘」、将来の良妻賢母として、「少女らしく」生きることを説く価値観と、家を出て戦い、忠君愛国の精神に殉じたジャンヌの強さを評価する態度とが併存している。ジャンヌ・ダルクの戦士としての行動への評価と良妻賢母主義的規範との両方を損なうことなく、伝記の中で両立させるために、「かよわい」が強い、アンビヴァレントなジャンヌ・ダルク像が造形されたと考えられる。宮崎湖処子「オルレアンの少女」や藤沢古雪訳『悲劇 オルレアンの少女』は、図らずも表象の転換点として機能し、ジャンヌ像の変容に影響したと考えることもできる。

本稿では少女向けのジャンヌ・ダルクの伝記五作品を合わせて検討したが、個々の作品を分析するためにはそれぞれの出典や原テキスト、作者固有の思想などを把握しつつ、より丁寧に検討する必要があるだろう。今後の課題としたい。

※本稿は、科学研究費補助金（若手研究）「明治後期から大正初期の少女雑誌におけるフランス文学・フランス文化の受容」（課題番号 21K12971、令和3年度～5年度）の研究結果をまとめた一部である。

---

も之を移すと能はざりき。」(同上、第55号、474頁。)/「父母の顔、叔父の風容、旧主を歡び迎ふべき牛羊、家庭の快樂、田園の生活、連鎖をなして彼が心眼に浮び来りぬ。彼は今一刻も他郷に止まる心なかりき。然れども不幸にして彼はオルレアンスの救ひ人なりき。[……]涙を飲むで王の留むるに従ひぬ。」(同上、第55号、475頁。)

<sup>52</sup> 久米依子、前掲論文、「少女小説一差異と規範の言説装置」、216頁。

<sup>53</sup> 久米依子は、「愛」を持つことを説いた論説として、巖谷小波「愛の光」(『少女世界』第1巻3号、1906年11月)を挙げた。Cf.久米依子、前掲論文、「少女小説一差異と規範の言説装置」、217頁。

<sup>54</sup> 久米依子は、「愛らしさ」を説いた論説として、沼田笠峰「少女教室」(『少女世界』第2巻3号、1907年2月)を挙げた。そこには「皆さんは、赤ん坊らしくもなく、また大人らしくもなく、どこまでも少女のやさしい、あどけない、ハキハキした心を失はずして、至るところで、愛せらるやうにならねばなりませんよ」と説かれた。Cf.久米依子、前掲論文、「少女小説一差異と規範の言説装置」、217-219頁。

<sup>55</sup> 久米依子、前掲論文、「少女小説一差異と規範の言説装置」、217-219頁。

# 『獨逸語學雜誌』の読者層 —雑誌記事の分析より—

中 直一

## 1 はじめに

本稿では、明治時代から昭和前期にかけて発行されたドイツ語学習雑誌『獨逸語學雜誌』が、いかなる読者層を有していたのかについて考察を進める。同誌はドイツ語学習雑誌ではあるが、入門的な要素はないと言ってよい。冠詞の格変化や基本的な動詞の変化等、ドイツ文法のイの一番に学ぶような事柄は一切書かれず、本稿でも触れるように、いきなり独文テキストとその和訳が示される（しかも、注釈なしの場合もある）等、中級・上級読者を想定した作りになっている。それでは、はたして一体どのような人々がこの雑誌を読んだのか。本稿では、この問題の解明が調査の中心課題となる。

『獨逸語學雜誌』は月刊の雑誌で、当初は（おそらくは当時の高等教育機関の入学時期にあわせて）9月に第1号が発行されたが、1920年の「第22年」から1月に第1号が発行されるようになった（その調整のため、「第21年」は1918年9月から1919年12月まで16冊刊行された）。またページの付け方も、第15年以降は各号ごと独立して付されている（つまり毎号1ページから始まる）が、第14年以前は「年」を通じて通し番号のページ付けになっている。国立国会図書館の所蔵情報には、「1号(15 Okt. 1898) - 11号(25 Aug. 1899), 2年1号(15 Okt. 1899) - 36巻8号(昭和9年8月)」と記されている<sup>1</sup>。書き方が統一されていないが、要するに1899（明治22）年から1934（昭和9）年にかけて、約35年の長きにわたって刊行された雑誌である。

筆者が調査のために参照し得たのは、国会図書館蔵書でなく、大阪大学が所蔵する通称「鈴木文庫」の冊子<sup>2</sup>である。鈴木文庫には35年分が全て存在しているわけではなく、配架されているのは同誌「第11年」（第11巻）から「第22年」までに限られる。刊行年ですと1908（明治41）年から1920（大正9）年までとなるが、鈴木文庫所蔵冊子には欠号も存在し、また「第12年」に至っては、一年分全てが欠けている。

本稿は、そのような限られた条件下での調査結果の報告となる。従って、網羅的な研究とはなり得ず、限定的なものに止まらざるを得ない。いわばサンプル抽出的な調査結果の報告となるが、それでも、明治末期から大正期の同誌の読者層の何たるかを知るための、ある程度の手がかりを得ることが出来るのではないかと考え、本稿を執筆する次第である。

なお本稿で『獨逸語學雜誌』から引用をなす際、なるべく旧漢字・旧仮名のままに引用をなしたが、当該の旧漢字や旧仮名がJIS第一水準・第二水準に含まれない場合は、現行の漢字・仮名で代用した。

## 2 読者投書欄（1）自らの所属を述べている場合

最初に取り上げるのは、『獨逸語學雜誌』の読者投書欄である。投書者の多くは、もちろん単に氏名を記すのみであり、投書本文の中で自分の身分や所属先を記している例は非常に少ない。しかし、皆無ではなく、こうした投書欄の中に記された、投書者の自己への

<sup>1</sup> 国会図書館の所蔵情報は同館 Web サービス(<https://ndlonline.ndl.go.jp/#!/detail/R3000000001-I000000067614-00>)による(2022年2月3日時点)。

<sup>2</sup> 故鈴木重貞大阪大学名誉教授が収集された明治期以降の独逸学関係書籍を「鈴木文庫」と通称している。鈴木名誉教授が生前に大阪大学図書館に寄贈された書籍は書籍番号が付され、大阪大学図書館でオンライン検索が出来る。しかし同名誉教授の没後にご遺族から寄贈されたものは、大雨で図書館の地階（寄贈直前の書籍を仮保管する書架があった）が浸水した際に、その多くが毀損した。水没を免れたものは、最終的に図書館に寄贈されることなく、大阪大学大学院言語文化研究科(2022年4月より人文学研究科)の言語文化専攻で保管されることとなり、現在は建物B棟4F教員交流室Ⅲの入り口ドア左の書架に配架されている。鈴木文庫の『獨逸語學雜誌』もそこにある。上に述べた事情で、図書館に寄贈されていないゆえ、阪大図書館オンラインカタログには登録されていない。

言及により、読者層の何たるかを直接的に知ることが出来る。

まずに指摘し得るのは、旧制高等学校の生徒からの投書が見られることである。

「高等學校第三部壹年生の來るべき暑中休暇に讀み得べき獨逸語小説、物語、詩（Märchen は省く）の書名、著者名を成るべく多數御示被下度願上候」（第 18 年第 11 号 p. 32, 1916 年 7 月）。

この投書から、この読者が高等学校一年生であることが推測し得る。この投書に対して、『獨逸語學雜誌』の編集者は、同じ号の中で、高等学校一年生に適したドイツ語読本をいくつか紹介している。

このような旧制高等学校生徒の他、旧制中学生徒からの投書も見られる。

「小生は中學生に候、今春四年級を修業するつもりに候、然し制度改正の結果今年一高の試験を試みんと決心いたし候、故に春來たりても今年は遊ぶ暇も無く候、獨逸語と數學を勉強致し度と存候」（第 21 年第 8 号 p. 32, 1919 年 4 月）。

第一高等学校をドイツ語と数学で受験予定の中学生からの投書（決意表明）であり、かなり若い世代の読者層が存在していたことが分かる。次の例も、おそらく受験を控えた中学生からの投書であると推測される。

「高等學校及び醫學專門學校本年度試験問題と其の解答とを御掲載被下度候」（第 18 年第 1 号 p. 32, 1915 年 9 月）。

ここでの「本年度試験問題」とは、入学試験問題のことを指すものと解されるから、そのような問題と解答例の掲載を求める読者も、おそらくは受験を控えた旧制中学生であろうと推測し得る<sup>3</sup>。ただし、旧制中学でドイツ語を学ぶ生徒は非常に少なく、多くの場合は旧制高等学校に入学してはじめてドイツ語に接したのであるから<sup>4</sup>、当時中学生で『獨逸語學雜誌』を購読していた人は少数であったのではないと思われる。

中学生や高等学校生以外、大学に入学後もドイツ語の勉強を続けている読者がいたことも分かる。

「獨逸國の大學で醫學を研究する積りであつたが今次の戦亂の爲め渡獨は出来ないことになりましたが、瑞西でも獨逸語の大學があると聞きましたが何と申す大學でありますか」（第 18 年第 2 号 p. 32, 1915 年 10 月）。

この投書の差出人は「静岡 醫生」（同号同頁）と記されている。これが帝国大学医科大学（医学部）の学生を指すのか、医学専門学校の学生を指すのかは、はっきりしない。あるいは、医学を研究する学徒、という意味なら、大学等をすでに卒業して、さらに医学の研究を続けている医学専門家かも知れない。

この投書者とは別に、醫生を名乗る投書者もいる。たとえば、「小生は一醫生に有之候」（第 19 年第 10 号 p. 32, 1917 年 6 月）というものであり、この読者も、学生なのか、すでに学部を卒業したレベルの人なのか、いまひとつはっきりしない。いずれにせよ、ドイツ語を学んで相当年数のたった読者であろうと思われる。

高等学校等でドイツ語を学んだとは明示的に述べてはいないものの、おそらくはそうであろうと推測し得る投書も見られる。それは、『獨逸語學雜誌』の内容や紙面（体裁）の

<sup>3</sup> この投書に対する編集者の回答は、同号の同じ頁に示されている。そこでは、「本誌姉妹雜誌精華書院發行「獨逸語研究」九月號に詳細なる解答が掲載してあります」と述べられている。つまり『獨逸語學雜誌』は、この段階（1915 年）では、高等学校入学試験問題やその解答を掲載しないで、それを姉妹誌に委ねるといふ編集方針をとっていたことが分かる。なお本稿の後ろの部分で触れるように、『獨逸語學雜誌』でも、後に高等学校等のドイツ語入試問題とその解答例が掲載されるようになっている。

<sup>4</sup> 『獨逸語學雜誌』第 16 年第 1 号 pp. 16-17（1913 年 9 月）に、旧制一高に学んだ人物の回想が掲載されているが、そこには次のように記されている。「中學で五年間英語を學んだのみで獨逸語とは如何なるものであるか、てんで想像だになし得なかつた青年が高等學校生活には入つて、天下の秀才を以て自任してうごめかす得意の鼻を先づ第一番にへし折るのは獨逸語の研究である」。本稿第 6 節で見るように、確かに一高のドイツ語入試問題が『獨逸語學雜誌』には掲載されている。だが、だからといって、一高入学以前にドイツ語を学んでいた生徒（中学生）が多数派であったわけではない。なお上記回想録には、旧制一高（当時は駒場でなく向丘）の寮のトイレに「雪隠で der, des, dem の寒稽古」という狂句の落書があったことが紹介されている。これも、旧制高等学校生が、ドイツ文法の最初歩である定冠詞の格変化に悪戦苦闘していたことを伺わせるものである。



改革に関する一読者からの投書の中に見られるもので、そこでは「獨逸語の學生は大抵レグラム(マ)の豆本で慣れてるから大概な細字には驚かない」(第19年第11号 p. 32, 1917年7月)と述べられている。この投書が掲載される少し前の号から、『獨逸語學雜誌』では、紙面改革について複数の読者から様々な意見が寄せられ、その中には、雑誌の活字を小さくし、総ページ数はそのままにして、情報量を増やすことを提案する意見が何件か寄せられていた。そのような意見が出た流れの中で、上に引用した投書の書き手も、活字ポイントを下げる案に賛成しているわけだが、自らを含めて、「獨逸語の學生」がレグラム文庫の小さな活字に慣れていることを、自説の根拠に挙げている。投書者の言う「獨逸語の學生」とは、独文科の學生というより、外国語としてフランス語ではなくドイツ語を学んでいる學生・生徒、という意味であろうと思われる。いずれにせよ、レグラム文庫<sup>5</sup>のドイツ語を読みこなすドイツ語力を持った読者層が『獨逸語學雜誌』には存在していたわけである。

上に見たように、受験を控えた中学生から、大学生までの生徒・學生の読者がいたことが分かるが、『獨逸語學雜誌』では、学校を卒業して社会人になった後も、ドイツ語との接点を求める読者層が存在していたことが分かる。たとえば、次の例では、高等学校及び大学を卒業後も『獨逸語學雜誌』の購読を継続していたと目される読者からの投書である。それは、「謹啓小生は第一高等學校時代より本誌愛讀者に御座候」という書き出しで始まる投書で、内容的には、ドイツ人との文通の方法などの掲載を、今後更に行うように『獨逸語學雜誌』編集部に求めた投書である。この文書の末尾には「在大阪赤門出身法學士 S. S. 投」(第15年第4号 p. 34, 1912年12月)という記載がある。このことから分かるように、この読者は、第一高等学校在学中から『獨逸語學雜誌』を読み始め、東京帝国大学法科大学(法学部)を卒業して、(おそらく)社会人になった後も、引き続き『獨逸語學雜誌』を購読していたと推測される。

また、役人となった人からの投書も見られる。それは、「西洋禮式に關する事項を貴誌に御掲載被下候はゞ我等の幸福と存候が如何」(第15年第5号 p. 36, 1913年1月)という書き出しで始まる投書であり、差出人として「神戸一官吏」と記されている。官吏ではあるが、神戸在住ということで、あるいは港町に來航するドイツ人と平素接触する立場にある職種の官吏かも知れない。

『獨逸語學雜誌』には、さらに、理系の専門職に就いていると思われる人からの投書も見られる。たとえば、工学関係では「小生は職として土木工學に携り居る身獨逸學の理解力に於ては未だ全く零と可申今より一意勉強獨逸工學書の翻讀自由の身となり度希望に有之候」(第15年第4号 p. 34, 1912年12月)というものがある。土木工学を専門とする社会人であることが分かるが、本人が「獨逸學の理解力に於ては未だ全く零」と述べていることから、多少の謙遜があるにもせよ、學生時代に学校などでドイツ語を学んでいなかった可能性が考えられる。逆に言うと、そのような読者をも、『獨逸語學雜誌』は惹きつけていたことが分かる。

---

<sup>5</sup> 旧制高等学校で、ドイツ語の授業テキストとしてレグラム文庫を使用していたかどうかについては、現在調査中で、筆者は結論に達していない。なお、『獨逸語學雜誌』第11年第6号 pp. 241-246(1909年2月)には各高等学校で使用された教科書のリストが掲載されている。1年生は、日本人著者による文法入門書を学ぶが、3年生ともなると、文学作品の原著が講読テキストとして使用されている。リストでは、単に作家名と作品名が記されるのみの場合がほとんどで、出版社については示されていないケースが圧倒的に多い。例外的に、第四高等学校「第一部三年(獨法文)」で、Schiller, Prosa (Cotta)、あるいは Grillparzer, Sappho (Schöning)との記載が見られる(同号 p. 243)。シラーの散文集がコッ社版で読まれていたことが分かるが、旧制第四高等学校の蔵書を引き継いだ金沢大学附属図書館には、Schillers Prosa : Schulausgabe (J.G. Cotta, 1890)が収められている。グリルパルツァーの戯曲『サッポー』の出版社であるが、Schöning社は未詳。Schöninghという綴りの出版社は実在したので、その誤記かも知れない。金沢大学附属図書館には配架されていないが、東京大学駒場図書館等には Grillparzers Sappho : ein Trauerspiel, für die Schule bearbeitet von Heinrich Vockeradt (F. Schöningh, 1906) 2. Aufl.が収められている。いずれも CiNii で調査した。『獨逸語學雜誌』に掲載された上記リストから、旧制高等学校で、ドイツの出版社の原書がそのまま授業の講読テキストとして使用されていたことが分かる。このようなことから、レグラム文庫が旧制高等学校のドイツ語講読テキストとして使用されていたことも推測し得る。

同じく工学関係では、ゴム製造関係者からの投書も見られる。「小生は護謨製造業に従事し居る者に候が何か最新の護謨製造法を詳に書いてある本を二三種御示し被下間敷や」（第15年第5号 p.36, 1913年1月）。

もうひとつ特徴的なのは、軍務関係者からの投書も見られることである。たとえば、「東京市中にて獨乙語を教ゆる獨乙人二三名を御紹介被下度願上候（麻布一士官）」（第15年第4号 p.34, 1912年12月）という投書からは、軍人の中でも士官クラス、すなわち下士官や兵とは違う身分の軍人がドイツ語を学んでいたことが分かる。

以上のように、官吏などの文科系、工学関係等の理科系、そして士官などの軍務関係者の読者がいたことが分かるが、そのような、当時のエリート層とは異なった層の読者からの投書も見られる。

それは、自ら「東京労働生」と名乗る人からの投書で、この人物は「いかにも獨逸人らしい健實さとしかも固執の強感情の持ち主から流れ出した韻律の掴み易い簡単な詩がありますならば御紹介下さいまし」（第21年第11号 p.32, 1919年7月）という希望を寄せている。ドイツ語の詩を、労働の合間に読みたい、という意欲を持つ読者である。

### 3 読者投書欄（2）どのような希望を持つ読者層か

次に、読者が自らの所属ないし身分を書いていない投書を見る。そのような投書の中にも、読者がどのような職種・専門職にあったのかということ推測し得るものがある。たとえば、次の投書は、ドイツ語圏の会社と商取引をする（予定の）職種にある読者からの問い合わせと思われる。「獨逸の商業作文を研究するに適當なる獨逸書は何と申し候や書名代價等御教示願度候」（第18年第1号 p.32, 1915年9月）。投書者は「商業作文」を研究するためのドイツ語原書がどのようなものであるのかを、編集部にお問い合わせしているわけであり、ドイツの会社と商取引のある会社に勤務する人物であった可能性がある。

専門書の紹介を求める投書は、他にも見られる。「獨逸商工業の現状を極く平易に一覽的に書きたる書物無之候や或は商業と工業と別々になり居候ても宜敷候」（第15年第5号 p.36, 1913年1月）。これなどは、質問としてかなり漠然としており、専門的というよりは、一般教養としてドイツ商工業についての知識を得たい読者なのかも知れない。

こうした投書者は、特定の専門職に就くことを目指している人々か、あるいは当該専門分野の職に就いたばかりの、まだ専門的知識の少ない段階の読者かも知れない。

以上のように、『獨逸語學雜誌』には、専門職に就いてドイツ書籍を読むであろう読者層が存在したと推測されるが、これだけでなく、専門的というより、一般教養としてドイツの美術や文学に関心を持つ読者がいたことが推測される。

たとえば、ドイツ美術に関し、「獨逸美術雜誌二三種御教へ下され度候」（第15年第5号 p.36, 1913年1月）という投書（問い合わせ）がある。書籍でなく、雑誌の推薦を求めているところから、専門的ともいえるし、一般教養としてドイツの美術に関心があるともいえる。微妙なところであるが、いちおう教養としてのドイツ美術に関心のある読者とみなしておく。

文学に関しては、『獨逸語學雜誌』の読者層について、まさに読者自身から編集部の編集姿勢を問う投書がある。それは次のようなものである。

「貴誌は如何なる境域の讀者を對象として文藝類の名著を紹介せらるゝにや伺上候（中略）高尚なる思想のみならず、否思想は高尚なるも、其の俗耳に入り易き様の言語文章にて、所謂世話＝くだけた邊を御紹介被下候得者難有存候」（第16年第9号 p.31, 1914年5月）。

この投書者は、『獨逸語學雜誌』が「高尚」な文芸類の「名著」の紹介に偏していることを批判しているのだが、それではこの投書者が具体的にどのような文章の掲載を求めているのかは、はっきりしない。引用文の、＝の部分には、原本の印刷が不鮮明で判読不可能である。念のため、その部分の画像を示すと次のようになっている。

#### 所謂世話：くだけた邊を

以下に、筆者の推測に基づく議論を進める。仮に、印刷不鮮明の部分が「物」であるとすると、その前の二文字と併せて「世話物」と読める。そうであるとすると、投書者は浄

瑠璃や歌舞伎で市井の一般人（町民や農民など）が登場する「世話物」のジャンルを引き合いに出して、言外の言として、高尚な文芸を「時代物」（おもに武家や貴族、僧侶が登場する）になぞらえつつ、ドイツの通俗的な文学作品（投書者のいう〈くだけた辺り〉）の掲載を求めたものとも考え得る。

ちなみに、この号（第16年第9号）より少し前の『獨逸語學雜誌』各号では、たとえば第16年第1号 pp. 1-4（1913年9月）には、当時まさしく活動中であった劇作家ホフマンスタールが自作『エレクトラ』について語った松居松葉宛書簡のドイツ語原文<sup>6</sup>、及び『エレクトラ』初演についての劇評（おそらくドイツの雑誌に掲載されたドイツ語原文）と、その和訳が掲載されている。（松居松葉は『エレクトラ』の翻訳を1913年に出版している）。同第2号 pp. 12-15（1913年10月）にはシラーの詩„Der Graf von Habsburg“の原文と解説・注釈・訳文が掲載され、引き続きリリエンクロンの詩„Es kam der Herbst“の原文と訳文が掲載されている。このように見ると、ドイツ文学史の教科書に出てくるような文豪や詩人、劇作家が好んで『獨逸語學雜誌』で取りあげられていたことは確かであるが、これは裏を返せば、上記の投書者の嗜好とは裏腹に、いわゆる高尚なドイツ文学の香りを求める読者層が存在していたということを推測させる。

#### 4 懸賞課題佳作入選者の所属

投書欄の他に、「懸賞課題」の欄からも、『獨逸語學雜誌』の読者層を推測する鍵が得られる。『獨逸語學雜誌』には、第18年第5号（1916年1月）から<sup>7</sup>毎号、独文和訳や和文独訳の問題が掲載され、次の号に、解答例と佳作入選者の住所氏名が掲載されている。

「住所氏名」といっても、ごく簡略化した記載で、「〇〇市〇〇町〇〇〇君」という程度のものである。このような情報のみでは、当然のことながら、当該入選者がどのような読者なのかは全く分からない。しかし、ごくまれに、自分が所属する学校の名や機関名を記しているものもある。そのような記載から、読者層を推測することが出来る。

以下に、「懸賞課題」の入選者住所氏名が掲載されはじめた第18年第6号から第19年第12号までの約1年半の各号のうち、入選者の所属が示されているものを列挙する。（なお引用に際しては、氏名に関しては、名字の部分で〇〇で示す）。

まず予想されるように、旧制高等学校等の生徒があげられる。例えば次の2例である。

「金澤市第四高等學校文科生 〇〇準應君」（第18年第7号 p. 31, 1916年3月）

「盛岡高等農林學校自啓南寮 〇〇卓二君」（第19年第4号 p. 31, 1916年12月）

だが、入選者の多くは社会人である。中でも、その多さが目を引くのは、軍務関係者である。以下に、列挙すると、14例の多きに達する。

「熊本歩兵第十三聯隊第七中隊 〇〇一雄君」（第18年第8号 p. 31, 1916年4月）

「弘前市歩兵第五十二聯隊第九中隊 〇〇芳男君」（第18年第9号 p. 31, 1916年5月）

「佐賀歩兵第五十五聯隊 〇〇東海彦君」（第18年第9号 p. 31, 1916年5月）

「松本歩兵第五十聯隊第一中隊 〇〇正三君」（第18年第9号 p. 32, 1916年5月）

「軍艦攝津 〇〇憲二郎君」（第18年第10号 p. 32, 1916年6月）

「大津歩兵第九聯隊第十一中隊 〇〇鐵三君」（第18年第10号 p. 32, 1916年6月）

「國府臺野砲兵第十六聯隊 〇〇二郎君」（第18年第11号 p. 31, 1916年7月）

「肥前大村歩兵四十六聯隊三中隊 〇〇逸雄君」（第19年第1号 p. 31, 1916年9月）

「和歌山歩兵第六十一聯隊附 〇〇武君」（第19年第4号 p. 31, 1916年12月）

「熊本歩兵第三聯隊十中隊 〇〇春雄君」（第19年第4号 p. 32, 1916年12月）

「朝鮮晋州守備隊 〇〇兵吉君」（第19年第6号 p. 31, 1917年2月）

「宇都宮歩兵第五十九聯隊第五中隊 〇〇濟美君」（第19年第7号 p. 32, 1917年3月）

<sup>6</sup> タイトルは、同誌目次では„Ein Brief über die Bühnenaufführung der Tragödie „Elektra“ (Hofmannsthal)“と記されている。

<sup>7</sup> 同号には、特にこの号から懸賞課題の出題を開始した旨が明記されているわけではないが、次号以下で単に「懸賞課題」と記されている標題が、この号では「新懸賞課題」となっている点から、1916年1月から、この読者参加の企画が開始されたと考えてよい。

月)

「越後小千谷工兵隊 ○○三秀君」(第19年第9号 p.31, 1917年5月)

「熊本歩兵第十三聯隊十中隊 ○○春雄君」(第19年第11号 p.30, 1917年7月)

ついで目立つのは、医療従事者である。

「福岡縣嘉穂郡山野炭鑛醫局 ○○つな君」(第18年第8号 p.31, 1916年4月)

「京都府立醫學専門學校内 ○○實君」(第18年第9号 p.32, 1916年5月)

「神田連雀町阿久津病院 ○○いし子君」(第18年第9号 p.32, 1916年5月)

「大阪西區新町緒方病院<sup>8</sup>内 ○○靜枝君」(第19年第1号 p.32, 1916年9月)

「大阪西區新町緒方病院 ○○國子君」(第19年第9号 p.30, 1917年5月)

この5例のうち、第2例を除いて、残る4例は、名前から判断して、看護婦(看護師)等の女性読者であった可能性がある。

軍務関係者や医療従事者については、以上のように複数の例が見られるが、その他は、調査した1年半の間で、各1例しかなかった。職務上ドイツ語を必要としていたことが推測し得るのは次の例である。

「神戸税關検査課 ○○峰造君」(第18年第8号 p.31, 1916年4月)。

税関吏であれば、様々な外国人・外国語と接する機会があったであろうから、そのような外国語の一つとしてドイツ語があったであろう。

このような職務上の必要性を離れて、一般教養としてドイツ語を学んだと推測し得る読者も想定される。たとえば以下の例である。

「和歌山縣西牟婁郡田邊小學校内 ○○慶三君」(第18年第9号 p.32, 1916年5月)

「牛込區榎町四きねや商店内 ○○初太郎君」(第18年第8号 p.31, 1916年4月)

第一例は小学校教員、第二例は商店員であると推測し得る。職務上ドイツ語が必要であるというより、一般教養としてドイツ語を学ぶ読者がいたことが推測し得る。(もちろん、小学校や商店で、職務上ドイツ語が全く必要でなかったとは断言出来ないが。)

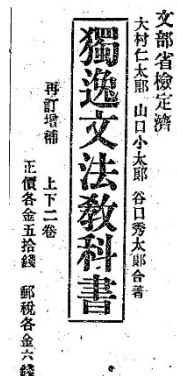
## 5 読者層のドイツ語力

ここで、すこし視点を変えて、どのようなドイツ語力の読者層がいたのかを見てゆく。上に検討してきたように、旧制高等学校等の高等教育機関でドイツ語を学び、その後もドイツ語で自己の専門分野に関するドイツ書籍の購読の必要性を感じる、あるいは職務上必要がある、等々の読者がいたことが分かった。このことから考えると、かなり高度なドイツ語力を持つ読者層が存在していた(そしてそのことを前提に『獨逸語學雜誌』の編集方針も定められた)と推測されるが、実際のところ、読者投書欄からは、様々なドイツ語力の読者が存在したことが分かる。

たしかに、次の投書に見られるように、文法書を読破した後の勉強方法について問い合わせる、中級レベル(あるいはそれ以上)の読者も存在した。

「謹啓三太郎文法二巻を讀みたる後猶ほ進んで精細なる獨逸文法書を研究致度候が日本語で書きたる良書有之候はゞ御教示願度候」(第18年第1号 p.32, 1915年9月)。

ここでいう「三太郎」とは、『獨逸語學雜誌』の創刊者である大村仁太郎、その後を継いだ山口小太郎、谷口秀太郎を指す。三太郎の文法書二巻とは、『獨逸語學雜誌』に掲載された広告を参照すると、大村・山口・谷口『獨逸文法教科書』上下二巻(精華書院)かも知れない。右に、上記投書が掲載されたのと同じ、第18年第1号に掲載された巻末近くの広告の図版を掲げておく。なお、先に本稿注5で紹介した、『獨逸語學雜誌』第11年第6号の各高等学校の使用教科書一覧では、一年生のクラスで大村・山口・谷口の文法



<sup>8</sup> 原文では「院病」となっていたが、「病院」の誤植と判断した。なお大阪西區新町の緒方病院とは、幕末の蘭学者緒方洪庵の六男緒方収二郎が設立した緒方病院であると思われる。梅溪昇『洪庵・適塾の研究』(思文閣出版、1993年)に資料として収められた緒方収二郎宛書簡の表書は、「大阪市西區新町通三丁目緒方病院内緒方収二郎様」となっている(同書 p.467)。

書が教科書として使用されるケースが多く見られる<sup>9</sup>。いずれにしても、一通り文法書をマスターした後のレベルの読者がいた、ということである。

ところで、次に検討する投書は、文法書をマスターした直後の段階の読者からの投書（要望）と思われる。『獨逸語學雜誌』には、「時文研究」という欄があり、ドイツの雑誌記事の原文や、日本の雑誌記事を独訳した上で、これを読者の独文和訳用の教材として掲載したものがあつた。この欄に対し、ある投書者が「甚だ勝手乍ら少しく希望を申し上げますが何卒御聽届あらん事を御願ひ申します」と述べ、それに続けて「時文研究に全譯を附する事。これがなければ自己の譯讀の正否を判別するに惑ひます」（第18年第7号 p. 32, 1916年3月）との要望を掲げている。

この投書が掲載された号からは、上記投書者の希望を容れて<sup>10</sup>、ドイツ文とその全訳が掲載されるようになったが、それ以前は、単に注が示されるのみであつた。たとえば、この投書が掲載される前の号では、次のようなドイツ文と注釈が掲載されている。

Zum ersten Neujahrstage<sup>(1)</sup> wurde die übliche Feier<sup>(2)</sup> im Kaiserlichen Hofe feierlich abgehalten. Im Kaiserlichen Empfangssaale<sup>(3)</sup> sammelten sich<sup>(4)</sup> alle Staatsminister<sup>(5)</sup> und führende Militär- und Zivilbeamten,<sup>(6)</sup> um dem Kaiser ihre besten Glückwünsche zum neuen Jahre darzubringen.<sup>(7)</sup>

〔註〕(1) 新年第一日に際し——(2) 例年の祝儀が——(3) 宮中正殿のこと——(4) 集合した——(5) 國務大臣——(6) 文武の顯官——(7) 新年の御祝詞を申上ぐる爲に。

(第18年第6号 p. 1, 1916年2月)

引用した「註」の部分を見れば分かるように、文法解説の注釈ではなくて、単に部分訳を示したに過ぎない。従つて、中級読者なら、註の部分をつなぎ合わせて、残る部分を自力で考えれば、何とか全文訳は出来るはず——というのが編集部のお考えであろう。

上記ドイツ文の難易度であるが、旧制高等学校で一年間ドイツ文法を学習していたなら、辞書をひきつつ、「註」を参照すれば、全訳はさほど困難ではないであろう。もちろん、各号によつて、「時文研究」欄に掲載されるドイツ語文の難易度は、必ずしも同一ではないであろうが、もし上記ドイツ語文程度の文章が「時文研究」欄の平均的なレベルであると仮定すると、この欄に全文訳の掲載を求める投書者は、中級の入り口程度のドイツ語力の持ち主と目される<sup>11</sup>。

以上見てきたように、学生や専門家としてドイツ語を学んでいる（いた）人々と思われる読者層が確乎として存在していたことが推測されるが、高等教育機関でドイツ語を学んだことがない読者もいたことも推測し得る。たとえば「埼玉 下學坊」と名乗る投書者は、投書欄の中で、『獨逸語學雜誌』執筆陣の一人である粕谷眞洋に宛てて「粕谷先生へ貴著「新撰獨逸自修文典」は獨學にして且つ初學者なる吾人に非常なる歓迎を與へたり」（第18年第8号 p. 32, 1916年4月）との謝辞を述べている。『獨逸語學雜誌』の記事内容ではなく、同誌執筆者の一人が書いたドイツ語入門書への賛辞を投書したわけである。ここで投書者が、独学であり且つ初學者であると述べている点が注目になる。旧制高等学校等でドイツ語を学ぶことのなかつた人が、市販の文法書の他に、自学自習の教材として『獨逸語學雜誌』を購読していたと推測し得る。

<sup>9</sup> たとえば、第三高等学校第二部一年で「大村山口谷口獨乙文法教科書前編」、第五高等学校第一部二年甲組及び乙組で「大村山口谷口著文法卷之二」、同第二部一年及び第三部一年「大村山口谷口著文法卷之一」、第二部二年「大村山口谷口著文法卷之二」、第六高等学校第一部二年丙組「大村外二氏、獨逸文法教科書上下」、第八高等学校第一部一年丙「大村山口谷口著文法上（参考書）」との記載が見られる。『獨逸語學雜誌』に掲載された各高等学校使用教科書の一覧は、各高等学校が独自にまとめたリストを『獨逸語學雜誌』が寄せ集めて編集したもので、記載方法は必ずしも統一が取れていない。

<sup>10</sup> 投書者への回答として、同号同頁には「早速御希望を講ずべく候」と記されている。

<sup>11</sup> ここで筆者は「中級の入り口」という言い方をしたが、これはもっぱら、旧制高等学校でドイツ語の学習時間が非常に多かつた時代を基準に考えている。現在の大学生では、たとえば führende Militär- und Zivilbeamten の部分に、単に「文武の顯官」という訳が与えられているのみでは、führende が不定形を元に作られた現在分詞の形容詞的用法（複数一格）であることが分からない可能性の方が高い。

## 6 編集部が想定する読者層

本稿第2節から第5節までの部分で、読者投書欄及び懸賞課題欄を中心に、『獨逸語學雜誌』の読者層を推定して来たが、本節では同誌の編集部がどのような読者層を想定して雑誌記事の内容を考えていたのかについて考察を進める。

第一に指摘したいのは、同誌の「受験者の爲に」というコーナーである。そこには、受験の心得が書かれ、あるいは実際の入試問題と解答例が掲載されている。

たとえば、第17年第2号 pp. 11-12 (1914年10月)には、『獨逸語學雜誌』の当時の「主幹」である山口小太郎による「受験者須知録(一)」が掲載され、その記事は「高等學校及醫學專門學校の入學試験が済んでしまったので、受験者は此處一寸休戦の状態で、燈火親むべき讀書期になつても、受験勉強よりは、小説でも讀もうといふものが随分居るであらう。しかし是れは頗る愚の至りである」という文章で始まる。ここで分かるように、旧制高等學校や旧制醫學專門學校の受験者を同誌は読者層として非常に重要視していた。実際、山口小太郎による「受験者須知録」シリーズは、同誌次号以降にも継続して掲載されている。

また、こうした記事の他、実際に旧制高等學校や醫學專門學校で出題されたドイツ語入試問題とその解答例も、同誌には掲載されている。たとえば、第16年第1号, pp. 9-10

(1913年9月)には「入學試験問題解答」との記事があり、第一高等學校で大正2年7月に実施された入學試験ドイツ語の問題と解答例が掲載されている。また第16年第3号 pp. 14-15 (1913年11月)に「千葉、岡山、金澤、長崎各醫學專門學校及東北帝國大學醫學專門部入學試験問題(大正二年七月施行)」の入試問題が掲載され、翌年にあたる第17年第1号 pp. 9-10 (1914年9月)には、同じく第一高等學校及び醫學專門學校(前年掲載と同じ医學校に、新潟が加わったもの)の試験問題と解答例が掲載されている。

試験関係から離れると、『獨逸語學雜誌』には様々な教育機関に関する記事が見られることに気づく。たとえば、第11年第4号 pp. 158-164 (1908年12月)には独逸学協會學校創立25年祭に関する独文記事„Die Feier des 25jährigen Bestehens der Schule des Vereins für deutsche Wissenschaften.“「獨乙學協會學校創立二十五年紀念祭」<sup>12</sup>が掲載され、第16年第4号 pp. 33-34 (1913年12月)<sup>13</sup>には「學校便り」の欄で、短い和文のみの記事だが、東京外國語學校修学旅行の話題が掲載されている。珍しいところでは第17年第7号 pp. 11-12 (1915年3月)で、獨逸学協會學校と成城學校の校歌のドイツ語訳が掲載されている。こうした記事から、『獨逸語學雜誌』編集部が、旧制中学やその上の高等教育機関の在學生を読者層のひとつとして想定していたことが分かる。

『獨逸語學雜誌』には、このような読者層より、さらに上の世代を念頭に置いた記事も見られる。そのことは同誌に、上に紹介した高等學校や醫學專門學校の入試問題以外に、その他の試験問題も掲載されていることから推測出来る。たとえば、第15年第2号 pp. 8-9 (1912年10月)には「明治四十五年七月文官高等試験獨乙語問題」、及び「明治四十五年七月東京帝國法科大學選抜試験問題答案」が、第16年第4号 pp. 12-13 (1913年12月)<sup>14</sup>には「京都帝國大學法科大學獨法科編入試験問題(大正二年十月施行)」、及び「大正二年度文官高等試験問題」が、そして第11年第2号 pp. 80-81 (1908年10月)には、「中學校教員檢定豫備試験問題答案 明治四十一年八月」が掲載されている。これらのことから、旧制高等學校から帝國大學への進学を目指す生徒や、さらには大學等から文官や中學校教員を目指す人々を『獨逸語學雜誌』が読者層として想定していたことが分かる。

ここで角度を変えて、『獨逸語學雜誌』に掲載された独文解釈の記事から、読者層を考え

<sup>12</sup> 記事タイトル欄にはドイツ語と日本語が併記されているが、本文はドイツ語のみである。

<sup>13</sup> 掲載号は表紙では「第十六年」と記載されているが、目次ページの次のページでは、「第十七年」、„Jahrgang XVII“と、日独両方において表紙の記載と異なっている。第16年のその他の号の表紙デザインと、この号の表紙デザインは一致しており、他方、第17年の各号のデザインとは一致しないことから、表紙における記載を正しいものと見なした。

<sup>14</sup> 第16年第4号については前注を参照。

て見たい。同誌には、様々な分野のドイツ語文が掲載され、その和訳が付されている。独文と和訳を同一ページに対訳形式で掲載する場合もあれば、数段落ドイツ文を掲載の後、その部分の和訳を掲載する、という形の場合もある。注釈は、付されることもあるが、多くの場合、単に和訳が示されるのみで、多くの読者は辞書と文法書を片手にドイツ語文にチャレンジして自己流の訳文を作り、それがどの程度雑誌掲載の和訳と適合しているかで、自己の力量をはかる、ということになる。

すでに本稿第3節で、読者の一人が『獨逸語學雜誌』の文学記事に関する注文を寄せていたことを紹介したが、そのことから逆に、ドイツ文学に関する記事がいかにも多く掲載されていたが分かる。すでに紹介したように、ホフマンスタールからの日本人宛て書簡、シラーやリエンクロンの詩が紹介されている他、クライスト没後100年の1911年には„Zum Kleists 100 jährigen Todestag.“ 「クライスト百年祭の日に於て」が掲載されている（第14年第3号 pp. 77-78, 1911年11月）。この記事は、標題こそ独日両語併記であるが、本文はドイツ語のみで、読者は自力でこの記事を読破しなければならない。それだけのドイツ語力を持ち、またドイツ詩人に関心を持つ読者がいることを、『獨逸語學雜誌』編集部は想定していたものと目される。

芸術関係では、第15年第1号 pp. 13-14 (1912年9月) に„Ein Jubiläumwunsch zum Wagnersgesang“ 「ワグネル百年祭に就きての望」が独日両語併記で掲載されている<sup>15</sup>。また第15年第1号 pp. 15-17 (1912年9月) には、ロダンへのインタビュー記事の独訳とその訳文„Die Bewegung in der Kunst“ 「藝術に於ける動」が掲載され、これも次号以降に引き続き続編が掲載されている。

社会科学の分野では、法学関係では第15年第3号 p. 26 (1912年11月) の「法曹界だより」„Juristische Nachrichten“の欄に„Die Todesstrafe in Österreich“ 「獨逸奥國に於ける死刑」をはじめとする2本の独日両語併記記事があり、経済関係では第15年第1号 pp. 20-21 (1912年9月) の「獨逸實業時報」の欄に„Verschiebungen im deutschen Welthandel“ 「獨逸世界貿易界之變遷」をはじめとする4本の記事が掲載されている。

こうした文科系の記事の他、医学系では、第15年第2号 pp. 25-26 (1912年10月) に「獨逸醫界記事」の欄において„Eiweißumsatz und Überempfindlichkeit“ 「蛋白質の代謝及び反應過敏」をはじめとする4本の独日併記の記事が見られる。工学系に関しては、第15年第2号 pp. 32-34 (1912年10月) の„Deutsche Nachrichten“ 「獨逸だより」の欄の中で一つまり、工学に特化した欄ではないが一 „Kunstseide“ 「人造絹」や„Sonnenmaschinen“ 「太陽發動機械」などの独日併記記事が見られる。

本稿第4節で指摘したように、懸賞課題の入選者には軍務関係者と思われる人が多かった。『獨逸語學雜誌』には、時代を反映して、軍事関係の記事も多い。たとえば第15年第1号 pp. 18-19 (1912年9月) には„Aus dem deutschen Exerzier-Reglement für die Infanterie“ 「獨逸歩兵操典抄譯」<sup>16</sup>が独日両語併記で掲載され、次号以降も継続されている。

以上の掲載記事の内容から考えると、『獨逸語學雜誌』編集部が、人文科学から社会科学、医学、工学、軍事に至るまで、かなり幅広い読者層を想定していたことが伺える。

このように様々な分野のテキストを掲載している『獨逸語學雜誌』であるが、各専門分野のテキストを読む読者の年齢層はどのあたりなのであろうか。これは難問であって、旧制高等学校の生徒が、自分が将来専門とする分野の独文テキストを読破する実力を身につけるために同誌を購読した場合も考えられるし、あるいは、すでに高等教育機関を卒業して、社会に出たキャリアの人々が、学生時代から引き続き同誌を購読していた場合も考えられる。

ここでひとつヒントになるのは、以下の投書である。その投書では、日本人独文学者の人物像を知りたいとの希望を寄せて、「獨逸語大家の評価を紹介され度候」と述べ、それに、

<sup>15</sup> この記事には「前號の續き」と記されているので、おそらく第14年第12号に掲載が開始されたものと思われる。筆者が参照した阪大鈴木文庫所蔵『獨逸語學雜誌』では、その号が欠号になっており、現物確認が出来なかった。

<sup>16</sup> 記事タイトルの下には「陸軍教授陸軍歩兵中尉 秋山精一譯」との記載が見られる。つまり、ドイツ語の翻訳に際し、『獨逸語學雜誌』では編集部外の専門家の協力を得る体制にあったことが分かる。

続けて「元高等学校教授であつた山田郁治先生は今何處に居られ候也」(第 18 年第 5 号 p. 32, 1916 年 1 月)と、具体的な氏名を挙げて、その消息を問うている<sup>17</sup>。このことから、高等学校の卒業生が、卒業後も引き続き『獨逸語學雜誌』の読者であつた可能性が推測される。

実際、『獨逸語學雜誌』には、旧制高等学校をはじめとする、高等教育機関のドイツ語教師についてのインタビュー記事等が盛んに掲載されている。たとえば第 16 年第 3 号 p. 30 (1913 年 11 月)の「獨逸語學界名流の面影」の欄には「第一高等學校教授獨逸語科主任 丸山通一先生」(同号表紙に記されたタイトルは「丸山通一先生訪問記」と題するインタビュー記事が肖像写真付きで掲載され、第 16 年第 5 号 p. 28 (1914 年 1 月)<sup>18</sup>には、同じく肖像写真付きで「京都帝國大學文科大學教授文學博士 藤代禎輔先生」という記事が掲載されている。さらに第 16 年第 9 号 p. 30 (1914 年 5 月)には、「第二高等學校教授 登張竹風先生」(表紙におけるタイトルは「戸張(マ)竹風氏(名家の面影)」)、目次におけるタイトルは「Professor Tobarī 戸張(マ)竹風先生の警咳」)、第 16 年第 10 号 p. 31 (1914 年 6 月)に「東京帝國大學文科大學教師文學博士 Prof Dr. Karl von Florenz プロフェッソル、フロレンツ先生」(表紙におけるタイトルは「フロレンツ先生を訪問す」、目次におけるタイトルは「Prof Dr. Karl v. Florenz」)、第 17 年第 2 号 p. 30 (1914 年 10 月)に「東京外國語學校教授 武内大造先生」(目次におけるタイトルは「東京外國語學校教授武内大造先生訪問録」)が、それぞれ「獨逸語學界名流の面影」の欄に掲載されている。

こうした有名教授への取材記事の他、『獨逸語學雜誌』には巻末近くに「雜録」という欄があり、その中の「個人消息」という小欄で、ドイツ語教員の人事異動や海外留学についての短信が掲載されている。たとえば、第 16 年第 3 号 p. 31 (1913 年 11 月)には、一高教授丸山通一が一年半の予定でドイツに留学すること、その後任として東京外國語學校から大津康が着任することが記され、第 17 年第 1 号 p. 31 (1914 年 9 月)では、東京外國語學校で水野繁太郎の後任として元第七高等学校教授の武内大造が任命されたこと、同じく第 17 年第 5 号 p. 32 (1915 年 1 月)には、獨逸學協會學校で 2 名のドイツ語教員が退職し、新たに 3 名が教鞭をとることとなった旨が報告されている。

ドイツ語教員の人事異動に関するこのような情報を、ドイツ語學習雜誌に掲載する意味を考えると、やはり読者の少なからぬ部分が、名前の挙がったドイツ語教員に教えを乞うたことのある(あるいは現に教育を受けている)人々であり、そのような情報が読者の興味を引くであろうと編集部が考えたからではないか、と考えられる。

## 7 おわりに

本稿第 2 節から第 5 節において、読者の側から(すなわち、読者投書欄の自己言及や懸賞課題佳作入選者の所属先から)、そして第 6 節においては雑誌編集部の側から(すなわち、どのような記事を提供していたかという側面から)、『獨逸語學雜誌』の読者層を推定してきた。『獨逸語學雜誌』の多くの読者は旧制高等学校ないしそれと同程度の高等教育機関でドイツ語を学ぶ学生・生徒、及び社会に出てからも自己の職業の専門分野との関連でドイツ語を必要としていた人々であつた、と思われる。そしてそれに加えて、教養としてドイツ語を学びたいと欲する読者が存在してことも伺える。

本稿冒頭で述べたように、筆者が参照し得た『獨逸語學雜誌』の冊子は、同誌全体のうちおよそ三分の一の期間に限られる。従って、本稿はいわば中間報告のような性質を持つ。将来、別の研究者が同誌の全体像を俯瞰して新たな研究をなし、本稿の欠を補っていただければ、と考える次第である。

<sup>17</sup> 編集者は、山田郁治元教授について「山田氏は京都に閑居して讀書研究に耽りて居らるゝ由」と回答している。なお山田郁治といえは、日本で初めてシラーの『ヴィルヘルム・テル』の翻訳(おそらくは部分訳)をなした人物として著名で、筆者も山田郁治の訳業について少し紹介したことがある。拙論「外國語の學習と翻譯—ひとつの言語文化交流論—」(藤本和貴夫・木村健治編『言語文化概論』(大阪大学出版会、1997年)p. 45 以下を参照。

<sup>18</sup> 第 16 年第 5 号に関しても、本稿注 13 で述べた第 16 年第 4 号と同様の乱れがある。



執筆者紹介（掲載順）

渡辺貴規子（WATANABE, Kimiko）

人文学研究科言語文化学専攻 講師

中直一（NAKA, Naoichi）

名誉教授

（2022 年 4 月現在）

言語文化共同研究プロジェクト 2021

言語文化の比較と交流 9

2022 年 5 月 20 日 発行

編集発行者

大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻